２１．長久手子ども食堂

記録：井上実

場　所：長久手中央図書館「楽歩カフェ」（長久手市坊の後 114 番地）
対　象：子ども、大人
参加費：子ども 300 円、大人 500 円
代　表：大原由恵さん（特定非営利活動法人 楽歩 副理事長）
初　回：2015 年 7 月 29 日（水）17：00～19：00　毎月第 2，4 水曜日

◎Facebook より
月に 2 回【子ども食堂】を経営しています。
子どもだけでも安心してご飯を食べられる場所です。
食を通じて、地域の子ども達の健全な育成を目的にしています。

参加日時①：2016 年 10 月 12 日（水）17:00～19:00（ボランティア 16:00～）
参 加 人 数：子ども 29 人，大人 13 人，ボランティア 9 人
献　　立：春巻き，おさかな，もやし和え，冬瓜ときのこのスープ
参　加　者：井上実

参加日時②：2016 年 12 月 14 日（水）17：00～19：00（ボランティア 16：00～）
参 加 人 数：たくさん
献　　立：シチュー，春雨サラダ，もやし和え，ご飯，果物
参　加　者：井上実、川野優月

◎流れ（1 回目，2 回目同じ）
16：00～　調理
17：00～　来店
19：00　　終了

会場は木目調で暖かい雰囲気。絵本やおもちゃがあり、待ち時間はそれらで遊んでいた。
カフェのようなスタイルで、スタッフが配膳をする。支払いは帰る時に行う。

◎きっかけ
2015 年の夏に知人に夏休みになると痩せてしまう子がいると聞いた。長久手にそういう子がいるのかは疑問だったが、もしいるのなら助けになりたい、みんなでご飯を…という思いで始めた。皆でご飯を食べるとおいしいと感じてもらえたらいいなと思っている。夏休み前にこの話を聞き、開催するまでの期間は 2 週間くらいだった。

◎場所
場所は NPO 法人「楽歩」が経営しているカフェを使用している。どこにするのか考えたとき

に、楽歩カフェだと図書館の隣なので場所が分かりやすいし、地域の人みんなが利用している場所なので気軽に来ることができると思い事業所に相談して営業後の店舗を貸してもらうことになった。

◎食材、献立
食材は購入か寄付。お米は貰い物。いつも食材提供をしてくれるおじさんがいて、果物や煮物、スタッフ用にマグロを持ってきていた。それ以外にも大量のコッペパンやポップコーン、クレープを持ってきていて子どもたちに大人気だった。
メニューのこだわりを強く持つことはせず、季節のものを取り入れられたらいいなと思う程度。基本的に来てくれる人が持ってきたものを出している。「みんなに食べてもらいたい！」という誰かのために何かしたいという気持ちを大切にしたいと考えている。また、こだわりを持ちすぎると敷居が高くなる気がするのであまりこだわりたくない。
タッパーを持参し、食べ物の持ち帰りができる。家庭状況が大変そうな家庭には多めに持って帰ってもらったりしている。
なんでもおかわり自由だし、幼児には子ども分の料理は量が多いので、ご飯だけ注文というのも OK。利用者の希望に応じて対応している。
アレルギー対策（口頭での確認）あり。

◎宣伝
子ども食堂を始めたばかりの頃は、市役所など様々な場所にポスターを掲載していた。ビラ配りなどもやり、広報活動をたくさん行った。だが、最も効果的だったのは、図書館にチラシを置いたことで、図書館から情報が広がっていったという印象である。他に、TV、新聞、参加者の口コミなどで広がっていった。

◎資金
現在は、寄付と大人の人が多めに支払ってくれるお金で安定して継続で来ているが、始めたばかりの頃は赤字で、事業所に金銭面の手伝いをしてもらっていた。

◎ボランティア
図書館のチラシを見ての参加が多い。参加者の中には、「きれいな格好をして出かけるのがうれしい」という人、旅行の日程を変更してまでも子ども食堂に参加する人がおり、それぞれの居場所になっている。

◎参加者
平均的に 1 つの家庭で、子ども 2~3 人＋親。中には 5 人兄弟の家庭もあった。仕事帰りに利用する人、子どもが幼く、普段ゆっくりと食事をとれない人など様々である。

◎課題、悩み
子ども食堂の広がりとして、家から近く、歩いていけるような場所に子ども食堂がたくさんできると良いと思っている。

◎感想

大人も子どもも自由にのびのびといられる場所という印象を強く受けた。食材を提供してくれているおじさんがいるのだが、毎回クレープやポップコーンを作ったり、野菜や魚の煮つけを持ってきてくれるらしく、お母さんや子どもたちにとってはおじさんが来るのが楽しみになっているようだった。

幼い子ども 2 人とそのお母さんの空いたお皿を片づけていたら、「普段こんなことないから嬉しくて泣きそう」と言われた。この家族に限らず、長久手子ども食堂には仕事帰りや幼い子を連れたお母さんやお父さんの利用者が多く、普段忙しくてなかなか余裕の持てない親御さんたちの心休まる場所になっているのだろうなと感じた。

◎写真